

第2期第18回生涯学習センター運営協議会 議事要旨

[日 時] 2015年12月18日(金) 14:00~16:00

[場 所] 町田市生涯学習センター 6階学習室2

[出席者] ※敬称略

委 員：石川清（会長）、井手伊澄、太田美帆、小川久江、押村宙枝、貝原俊明、佐合昭浩、辰巳厚子、富川尚子、西原要四郎、布沢保孝、二見秀太郎、柳沼恵一、吉川雅子 以上14名
事務局：稻田センター長、鈴木担当課長、松田事業係長、小林管理係長、高木担当係長、村田担当係長、小山主事（記録）

[欠席者] 岩本陽児

[傍聴人] 1名

[資 料]・第18回生涯学習センター運営協議会レジュメ

- ・市民大学「地域を育てる」学びの具体的な方策について（当日資料）
- ・「市民大学」の現状課題と今後の方向（当日配布）
- ・2015年度生涯学習センター事業 企画書 資料1~7
- ・2015年度生涯学習センター事業 企画書兼事業評価シート 報告1~報告3
- ・東京都公民館連絡協議会合同部会 11月月例会メモ（当日配布）

会 長：配布したレジュメの進行に変更がある。協議事項、報告事項の後、市民大学についての議論を行っていきたい。

<協議事項>

1、2015年度生涯学習センター事業の企画について

(1) 癒しの古典民俗楽器ハンマーダルシマーとピアノデュオコンサート

事務局：一資料1の説明ー

3人の委員から事前意見をいただいた。辰巳委員から「当日キャンセルの座席を埋める取り組みは、職員の方は大変だがよいのではないか」、佐合委員から「民族楽器を身近に、かつ気軽に観賞できる良い機会である。コンサート事業として定着している。文化、芸術鑑賞の機会提供として、継続してほしい。当日欠席対応など工夫されたい。」、西原委員から「年末はクリスマスを中心にコンサートが多く開催されるので、今回は申込みはやめて先着順で行ってはどうか」の3点をいただいている。今回は、イベントダイヤルによる先着順申込みで受付を行う予定である。

(意見・質問)

質問なし。

(2) 市民企画講座「ママ・パパのためのワクワク憲法教室」

事務局：一資料2の説明ー

佐合委員からの事前意見で「安保法制成立に伴い、憲法問題がにわかに盛り上がり始めてきた。憲法の基本が学べるよい機会である。ママ・パパのため、となっているが、全5回、平日、月曜午前中に、パパが参加できるか心配である。市民企画であるので、企画者はなんらかの募集策があると思うが、確認されたい。」といただいた。確かにその通りであるが、今回は若い世代の母親をメインに保育付きで参加していただきたいという希望からこのよう設定をした。また、辰巳委員からの事前意見では「「ママ・パパ」とするのであれば、月曜日の10時開講という時間設定は、パパの参加が少々難しいのでは？「子どもに伝える」を重視するのであれば、「学んで子どもに伝える・・・」「知って子どもと語り合う・・・」というタイトルでもいいのでは？⑤まとめと話し合いの部分は、どのように進めるのでしょうか。」と進行について質問をいただいた。企画の皆さんからカフェ形式でやりたいと希望をいただいているので、話し合いながら進行していきたい。西原委員からは「わくわく気分で憲法を論ずるのは無理がある

のではないか。内容タイトルを検討したほうがよいのではないか。」と意見をいただいている。若い世代にキャッチャーなタイトルをつけ、お越しいただきたいという意図でこのようなタイトルをつけている。

(意見・質問)

委員：若い世代ではない父母は、対象外になるのか。

事務局：市民大学などでも関心が非常に高いテーマであるが、参加されている方は圧倒的に60代以上の方である。今回は、ターゲットを絞る形で実施したい。

委員：人気が非常に高いテーマだと思うが、45人定員はいかがなものか。

事務局：一方的に聞く講演会にはしたくないという思いで設定している。グループ討議などの手法を取り入れながら、集まった人たちの仲間作りまでできればという意図がある。

委員：定員45人ではすぐに埋まってしまう可能性がある。キャンセル待ちなどの対応も取ると思うが申し込んでも1度も参加しない方もいる。欠席者に対する手立ては考えているか。

事務局：現在は徹底できていないが、2回くらい欠席した方への呼び掛けやキャンセル待ちの繰上げを行うといったことが考えられる。

委員：安全保障関連法案の時に国会の前に集まった中に幼稚園の母親グループがいた。子どもが大人になったときのことを考え、今まで興味を持っていなかった若い世代が動いていた。幼稚園、小学校、中学校にチラシを配布したらどうか。一人ひとりよりもママ友同士で動こうと誘いかければ、受講後もグループ活動などしやすいのではないか。

会長：対象が高校生以下の子どもを持つ方であるが、申込みの電話で自己申告するのか。

事務局：自己申告を想定している。

委員：幼稚園などで大きく周知して「私たちがターゲットなんだ」と思ってもらったほうが、効果的だと思う。

(3) 第3回利用者交流会

事務局：一資料3の説明ー

辰巳委員から「利用者交流会が「利用者の交流」に止まらない、外に発信できるものを加えられるといいのではないでしょうか。」と事前意見をいただいている。今後企画していく上で、どういったことでアピールができるのかを検討していきたい。

(意見・質問)

委員：2度、利用者交流会委員として携わった。もっと色んな世代や活動をしている人が集まれる場にすること、1度きりではなく持続させていくことが大きな課題である。また、「生涯学習センターってなにするところ？」という連続講座で生涯学習センターの役割を学習し、目的に沿ったイベントとして扱っていくことになった。最終回ではティーパーティーを開催し、さらに今後どうして行くかを話し合った。期待を持って交流会に取り組んでいいけるのではと思っている。

委員：去年まで参加した経験から言うと、時間に縛られてしまう傾向があった。主催者サイドの都合の時間で括らないで、できるだけ参加者でタイムスケジュールを作つていけるものにして欲しい。開催したからよかったのではなく、参加者がどういった成果を持って帰られたかをどこで判断するのか疑問が残る。開催した成果がその後どのように活かして行くのかも、この時点で周知していただきたい。

事務局：どの時点での成果になるか。終了後、報告の時点ということか。

委員：終了後でも良いし、今のように企画書の発表時点で過去の結果を活かした点を教えて欲しい。

委員：利用者交流会で普段利用されている方々が生涯学習センターをさらに良くして行こうとアイデアを出し合って行くのは良い方法だと思うが、先日取り組んだ例を示したい。健康、防災など1つのテーマを挙げ、テーマに対し利用者がどんなことを取り組んでいいけるかを出し合って行く。横浜市青葉区では、マイ防災袋というテーマを挙げ、健康や子どもなど普段異なる活動をしている人たちがそれぞれの防災袋を提案した。1つのテーマを持って取り組むとアウトプットがはっきりして良い方法だと思う。

会長：手順としてはまず企画運営委員の公募を行うことになるのか。いつ頃になるのか。

- 事務局：委員の公募は1月11日号の広報まちだに掲載し、2月から隔週で7回程度会議を行う。4月の広報まちだで4月29日の開催を掲載する。
- 委 員：事前意見にも書いたが、1回目に比べ2回目の参加者が激減したとのことで残念である。理由はなぜか。
- 事務局：1回目は企画運営委員の方々がかなり奔走されたこともあるが、センターまつりをテーマに掲げた分科会があり、そこで人集めを行った点もある。前回2回目は企画運営委員がそれぞれの課題で分科会を立ち上げたのもあったが、2回目は全体会で基調講演をした結果それに伴う分科会などがあり特色が出なかったことを分析したように思う。
- 委 員：活動しているサークルやグループ全体ではどのくらいあるのか。また、活動グループの代表者が参加するとして適正参加人数はどのくらいになるのか。
- 委 員：まつりでは50団体が参加する。市民大学修了生団体は50程ある。そういうものを積み重ねていけば100団体以上はあるが、すべて参加するのではない。また、センターを利用している団体であれば1000以上になるのではないか。
- 事務局：登録は1000を超えており、中には現在活動していない団体もいる。年間利用人数はのべ17万人程が利用している。
- 委 員：そうなるとやはり1つのテーマを決めておかなくては難しい。センターまつりに参加した知人が、コンサートが非常に楽しかったと言っていた。
- 委 員：利用者交流会はセンターまつりとリンクして考えている方が多い。別に考えなくてはならないと思う。できるだけ広い視野でテーマを選択して欲しいと思う。
- 委 員：資料を見る限りでは4月29日に交流会を実施することの企画書に見えるが、話を聞いていると交流会をどうやって作って行くのかの方が大事だと思う。どうやって働きかけばいろんな人に生涯学習センターのことをわかってもらえるだろうかと話し合う部分があって、4月29日が発表になるのかと思うが、なぜ企画書には結果発表の部分しか書いていないのか。生涯学習センターの企画としては、前段階の話し合いの所にしっかりターゲットを置いて考えなくてはいけないのではないか。
- 事務局：こういった事業は、企画委員の方に取り組んでいただき、それに対して応募して参加するという形式である。おっしゃるように事業は2段階なので、本当は企画委員が作った企画が確定した段階で再度企画書を出して154人を集めるというのがよいのだろう。今の段階では何も企画がないということになる。
- 委 員：私も携わっているが、利用者交流会の企画メンバーが中心になり20人程で「生涯学習センターってなにするところ？」という講座をやっている。講座を進める中で利用者交流会をどういった方向性で行くかを話し合ってきている。ある程度答えが見えてきているが、それを答えとして出していいのかをこれから企画委員を募りもう一度吟味することも必要であるし、職員の方々とすり合わせも必要だと思う。そういう事情で現段階では企画書に書くことができないが、準備は積み重ねてきている。
- 委 員：本来、今回の企画書が出てくる前に企画委員募集の企画書があれば、携わっていない運営協議会委員の皆さんにも伝わりやすかったのだと思う。
- 事務局：通常の事業は企画が出来た段階で企画書を提出しているが、今回に関しては企画を考える部分も事業ということで、分かりづらいものになってしまった。
- 委 員：その部分を事業として扱えば、生きるのだと思う。
- 会 長：これから、地域を育てるような活動に寄与するような支援をするのが、生涯学習センターの役割の1つとすると、まずは企画委員をどうやって集めるかということ、交流会当日の企画の2段階で両方大事である。そういう事業も今後出てきても良いと思うし、他の事業でもこういった発想が必要である。
- 事務局：評価シートの出し方の話であるが、例えば市民大学でプログラム会議があり企画を行い評価シートの企画書を作成しているなどそれぞれ進行の仕方があるので、工夫として参考にさせていただくことはできると思う。
- 委 員：何回目か話し合ったりする時間があり、最終回が交流会という企画書になるのかと思う。

(4) 2015年度まちコレ

事務局：一資料4の説明一

辰巳委員から「ファッションと書道との親和性とはどのようなものですか。何か共通のテーマを設定してみるのも一つの方法と思われます。」と事前意見いただいた。昨年、若い世代向けに書道家の講演会を行った際にパフォーマンスとしての書道もやっていただきあまりにも衝撃的だったので、煌びやかなライトを浴びてファッションショーと同じようにパフォーマンス性があるものとして表現できるのではないかということで、2つを抱き合わせた企画である。佐合委員からは「目的、内容を明確にし、若年層、市民を巻き込んだ企画運営をしてほしい。中、高、大学、専門学校などに的を絞って、これぞ、と目をつけた学校やグループ、団体、若者たちに企画運営を任せて、イベントをやらせてみたらよい。過去の成功事例を再展開してもよいと思う。」と事前意見をいただいた。

（意見・質問）

会長：講師の方はどういった関わりをするのか。

事務局：前日や当日にかけて、主に照明している方で舞台照明や演出指導をプラスアルファでお願いする。

委員：町田工業高校はアートのような学科を持っていて、服飾に興味を持っていたり課題として取り組んでいる生徒と思う。地元に関連分野の学校があるので、実際に声掛けたか、高校生がイベントに関わる時間が持てるのかわからないが、こちらからアクセスを行い幅広い世代への声掛けを積極的に行なって欲しい。

事務局：以前の担当者としては、今もいくつかの市内の学校には声掛けを行なっていると思う。町田工業高校の中で服飾などを扱っている学科があるかを担当者が知っているかはわからないので、伝えたいと思う。

委員：もしかしたら、町田総合高校などでも芸術を選択されているお子さんがいるかもしれない。

事務局：私が知る限りでは大学、専門学校を中心に声掛けをしているので、高校には行なっていないと思う。

委員：もう少し広げて周知していただければと思う。

委員：事業内容にもあるように、非常に上手い具合に回転している企画なのではないか。的を絞って企画運営までバックアップすることにより、若年層の参加意欲が増すだろうと思うし、生涯学習センターのPRにも繋がるのではないか。浴衣の着付けなど講座のように、どんどん若年層を巻き込んでいって欲しい。効果にも繋がると思う。

委員：おっしゃるとおりで、生涯学習センターの企画のなかでも面白いものである。華やかなイベントであるので秋の開催を考える必要がある。2月の一番寒い中で、卒業シーズンもあるので人が集まりにくいのではないか。

事務局：昨年度は12月に行なったが、参加する学校が少なくなってしまったことがあり、時期を変更した。

会長：卒業制作発表を兼ねる目的もあるのではないか。

事務局：物を作っている学部は到達点がありそれに向かって取り組んで行く作品の制作途中でやろうとすると発表するものが無いということになり、期間を決めるのが難しいという点がある。また、学校によっては総合的にプロデュースをしたいという意見もある。そういう学校同士をどう調整していくかという難しさもある。

会長：横浜女学院中学校は書道で有名なのか。

事務局：以前賞を獲ったことがあると聞いている。町田市内でも10数校あつたが、パフォーマンス書道をやっていなかった。対象を近隣市に広げ連絡をしたところ、横浜女学院中学校にやっていただくことになった。

委員：中学校は試験前の時期である。

委員：今後、日程の検討をしていただきたい。ファッションとコラボレーションするのであれば、例えばダンスを披露するならダンスチームごとに衣装のチームとコラボレーションしたり、書道なら袴や制服の衣装をデザインするような発想で考えると幾らでも組み合わせられると思う。パフォーマンスする側も作る側も発表の場となるので、将来的に大きくしていくことをお考え

であれば検討いただきたい。

委 員：私が拝見した時は観客が入れないくらい賑わっていた。ステージとして階段を使っていた。また、入れない人たちがホワイエにもいたので、展示だけでなくステージとして広げるなど活用してはどうかと思った。館内全体を活用した取り組みができないものかと思った。

事務局：大学や専門学校側とランウェイを作るかを話し合った末、その時はいらないという結論になった。会場を有効に使う方法の問題なので、対応は可能である。ホワイエについては、以前はヘアアレンジや小物の作成など7階全体を使ったこともあった。その年の参加校の要望や内容によって動きや幅が出ることはある。

委 員：昨年の場合は、ここでは狭いと感じた。開催時期のタイミングも良かったのかもしれないが、すごく活気があって大事して欲しいイベントだと思った。

(5) 2015年度家庭教育支援事業について

事務局：一資料5の説明ー

(意見・質問)

会 長：本日の忠生図書館での実施について、参加人数はいかがであったか。

事務局：15組の参加があった。

委 員：忠生地域ばかりでの開催であるが、意図はあるのか。

事務局：今回は忠生地域に特化して開催した。

委 員：参加人数が10月開催30組から12月開催では半減しているが、その理由はどのようにお考えあるか。

事務局：天候などの状況にもよるかと思うが、先方との連携の問題もありたまたまこの回は減ってしまったのではないかと思う。

委 員：内容によるものなのか、今日は天候が良いと思うがなにか関係しているのか。

事務局：内容については先方とも確認して、次に活かしたいと思う。

委 員：忠生地域だけの開催を分散させることはできないのか。

事務局：今年度は初めての試みということで、庁内連携を含めて忠生地域を重点的にモデルとしてやってみようということになった。上手くいったら他の地域でも展開していきたいという思いでいる。

委 員：開催時間は午前中か。

事務局：午前の開催である。

委 員：今日開催の参加人数が少ないので、兄弟に幼稚園児がいる場合は午前保育の時期であるからかもしれない。

委 員：連続講座ではなく単発で参加できるのであれば、子どもセンターでの開催はいつも通っている層が参加しやすく、図書館には普段行っていないということだけかもしれない。同じ内容を3回行なっているのか。

事務局：テーマなどは異なるものである。

委 員：資料に「各部署が」という記載があるが、実際には開催場所の職員なのか、開催場所が変わっても実施メンバーは色んな部署から集まった職員で実施するのか。

事務局：開催場所の職員と打ち合わせを重ねながら計画を進めていった。

委 員：中心になるのは開催場所の市の職員になるのか。

事務局：半々である。例えば、資料の主な内容の「手遊び、スキンシップ遊び」については、児童厚生課である子どもセンターの職員が担当し、学習をテーマにした内容については生涯学習センターの職員がメインで担当している。少しずつ仕事を分け合いながら持ち合う形で1つの講座を作り上げている。

委 員：他課との共催とは、具体的にはどんな部署か。

事務局：子どもセンターは子ども生活部児童青少年課、図書館は同じ生涯学習部の忠生図書館である。

会 長：今回はテスト的な実施とのことだが、事業としてこれから展開できる感触はあるか。

センター長：他の地域への展開については、効果や体制を見ながら今後検討していきたい。

委 員：毎回地域での展開や活用の話が出ているので、こういった事業はすごく良いと取り組みだと思

う。忠生地域の開催が多いので、忠生地域では新しいことが始めやすい傾向があるのかを感じた。ぜひ他の地域でも展開して欲しい。

委 員：1つ提案である。折角、生涯学習センターには家庭教育を支援する学習の場があるので、その修了生に事業主旨を理解し学習の中に取り込んでいただき、こういった場を地域での活動の機会として提供してはどうか。

事務局：なかなかそこに行き着くまで難しいところである。家庭教育支援学級があっても、わが子ではないお子さんの活動となると続かない面もあると思う。少し長い目見て、そういった活動も含めて考えていきたい。

会 長：利用者交流会と同じように2段階で考えることが重要なことだと思う。

委 員：子育てサークルの作り方講座をやってもらうと地域での展開も考えやすい。世代交代していくても構わないと思う。

委 員：生涯学習センターではコーディネーターを育てる講座もあるので、企画に対してどんな人に頼んだら良いかといったコーディネートの実践の場として、こういった機会を使う。現役の子育て世代も良いが、普段朗読している人に子ども向けの朗読を行なってみませんか、歌を歌っている人に子どもと一緒に歌いませんかと持ちかけて今まで自分たちのためにしていたことを、社会に還元する方法がありますよと誘導する1つの手段にしていけば、職員もコーディネート機能を任せることができるのでないか。

委 員：地域の中でも「109」や「公民館」という認識があり、生涯学習センターとして認知していない人がかなり多く、PRしていかなくてはならないと感じる。4月に成瀬センターがリニューアルオープンするので、柿落としに企画を持って行くのはどうか。

事務局：2月までというのが現実的に難しいと感じる。

事務局：継続的に取り組んで行くことが必要だと思う。イベントとしてやるのは1つの手だと思うが、例えば定期的に月に1回程実施して行くことで地域に定着し、保護者同士の仲間作りの場や遊び場になっていくと考えているので、できれば子どもセンターや保育園などで決まった場所や曜日などで定期的に取り組んでいきたいというのが現在の考え方である。

委 員：そういう点でも成瀬センターはぴったりの場である。小学校を建て直し教室やホールもあり、やろうと思えば何でもできる施設である。ぜひ、そういった施設にも手を差し伸べていただければと思う。

会 長：鈴木担当課長がおっしゃるのももっともだが、まずはテスティングをしなくてはわからないと思う。

委 員：ぜひとも、生涯学習センターを宣伝していただきたい。

（6）国際交流センター共催講演会「外国の踊りと演奏とお話と～外国人から見た町田」

事務局：一資料7の説明ー

（意見・質問）

委 員：対象はどういった人を想定しているのか。

事務局：歌などを入れたのは国際交流などを今まで意識していなかった人にもできるだけ参加していただいて、どれだけ町田市に外国人の方がお住まいになっていて、抱えている課題や感じていることを理解していただきたい。内なる国際交流を進めたいと考えている。

委 員：丁度この時期に小学校2年生がモンゴル民話を勉強していて、小学校では馬頭琴奏者を求めている。馬頭琴奏者の演奏を聴きにぜひこのイベントに聞きにいきましょうというPRができると思う。

会 長：どのくらいの参加人数を想定しているのか。

事務局：国際交流センターからはこれまであまりにも人が集まらなかつたので、どうにか集めたいと言われている。タイトルについては、今週中に考えることになっている。

委 員：タイトルが漠然としているので、誰向けなのかと感じた。小学生が対象なのであれば、対象にあったタイトルを付けたほうが良い。

委 員：ダンスもあるので、参加すれば楽しいイベントのはずである。

- 委 員：子ども向けに交流をメインにしたバンブーダンスと一緒に体験するような企画にするのか、大人向けに問題を抱えている方への理解を中心にするのか。
- 事務局：どちらかというと大人向けの方を考えている。
- 委 員：内容、タイトルともに明確に打ち出したほうが良い。

2、事業評価について

(1) 昭和薬科大学共催市民講座「核医学って何？」

事務局：一資料6の説明ー

タイトルについて辰巳委員からも佐合委員からも指摘を頂いている。言葉が難しかったのではないか、市民にわかりやすく参加してみたいと思えるタイトル付けが必要ではなかったかという点はまさに課題である。連携を蜜に取り、事前にわかりやすい表現やキャッチーな言葉を入れたタイトル付けなどをお伝えできればよかったですと反省している。

(意見・質問)

会 長：ホールを使うと定員は154名だが、充足率46%だからといって数字が低いと気にすることはないと思う。

事務局：コンサートの場合満員になるので充足率の低さについてはなんとも言いがたい。出席率は高いので申し込んだ人にとっては関心の高いものであったということか。

委 員：小さい部屋で開催し満員にするという考えではなく、やはりできるだけ大きな部屋で開催する考えであるか。

事務局：できるだけ大きな部屋で多くの方に参加いただくことを求めている。

事務局：講義を聞いていると、脳、検査、治療、がんなどにも関係している話ということがわかり、病気を心配している方や治療されている方が参加されていたのでそういった点を前面に出すことでさらに人が集まつたのではないかと思っている。

会 長：学校側は「核医学」という言葉を使いたい要望があるのか。

事務局：そうである。

委 員：講演1と2の時間配分は1時間ずつか。生涯学習センターとして大学教授を呼び講演いただきたいことがあると思うが、市民が聞きたいのは講演2「核医学の検査でわかること」の内容であるので、時間配分を工夫いただきたい。昭和薬科大学共催講座は毎回専門的過ぎる傾向があるのでもう少し共感性のある内容にしていかないとうまく行かないのではないか。

事務局：毎年タイムリーな話題を提案していただいている。一昨年は脳、前回は感染症がテーマで参加者の関心は非常に高かった。今後は工夫し相談しながら進めていきたい。

<報告事項>

1、事業評価の最終報告

事務局：報告1～3について、資料のとおり報告する。

2、センター長報告

12月議会が12月22日で終了する。生涯学習センターは行政報告をさせていただいた。詳細については、町田市ホームページをご覧いただきたい。

3、第3期町田市生涯学習センター運営協議会市民委員の公募について

1月1日号の広報まちだに、公募記事が掲載される。ぜひご覧いただきたい。

4、東京都公民館連絡協議会の活動について

○委員部会について

委 員：平成27年度東京都公民館連絡協議会委員部会第2回研修会が1月30日に狛江市中央公民館で開催される。テーマは「市民の学びから市民活動へ～板橋区実践の学びから市民活動へ～“ともに創る未来のための10年”である。11月に開催された関東甲信越静公民館研究大会で岡山市のE S Dを学んだが、今回は東京都内近隣のE S Dの実践例をテーマとして取り上

げられる。ぜひ参加いただきたい。

5、その他報告事項

<市民大学について>

会長：まずは、委員2名にまとめていただいた当日資料のご説明をお願いしたい。

委員：事務局から前回までのまとめの依頼があり、当日資料「市民大学「地域を育てる」学びの具体的な方策について」を作成した。前回は市民大学のコンセプト「あなたを励まし地域を育てる」の「地域を育てる」部分のゴールはどこにあるのかという議論がなされた。市民大学のゴールは社会をつくる学びの方向性の中でどう位置づけられるのかについて、第16回運営協議会の辰巳委員作成資料を参考すると、3つのステップがありそれぞれ生涯学習センターとしての学習目標が考えられる。具体的には「①コミュニティの再生・創造」は「受講生同士の意見交換促進」、「②活動へつながる市民性を養う」は「グループ活動への意欲滋養」、「③市民協働に参画する」は「行政、大学等、NPO、地域団体についての理解」という学習目標になる。学習目標を満たすために必要なこととして、「①自分の生活と地域課題をつなぐ講座テーマの設定」、「②受講者同士の意見交換の場を保障する」、「③受講生が自ら問題を発見し、共有できる講座の進め方」、「④グループづくりのために背中を押す仕組み」、「⑤行政、大学等、NPO、地域組織との交流」の5点が挙げられる。また、現状の市民大学講座と地域の課題がどのようにマッチングするのかを考えると資料の通りになる。そして、「市民大学講座見直しの案」として私の提案を3点挙げた。1点目は「①現状の市民大学講座は基礎講座として継続」とする。現状の市民大学講座は地域の課題を扱う講座が大半であるし、「学習目標を満たすために必要なこと」で挙げた「受講者同士の意見交換の場を作る」、「受講生が自ら問題を発見し、共有できる講座の進め方」についても運用で実現できるものだと思うので、現状の講座は継続していくべきだと思う。しかし、もう少し地域課題に突っ込んだ講座もあってもよいのではないかと思い、「②まちだ学講座（仮称）を新設」、「③総合講座（仮称）を新設」を提案したい。「②まちだ学講座（仮称）を新設」は、自然、環境、福祉をそれぞれ自分で最低4講座以上選択し受講し、講座終了時には、各自、成果を発表するものとする。また、定員は意見交換や発表を行うのに適した10名としたい。こういった講座を設けると、自ら選択し問題を発見し、地域の問題解決のきっかけになりうるのではないかと考える。また、「③総合講座（仮称）を新設」については、まちだ学講座の修了者を優先し、ゼミ形式で対話・発表中心、1回90分程で期間は半年～1年の講座とする。講師は、大学関係者、プログラム委員、地域活動団体関係者を招き、1回500円で講師謝礼と使う。総合講座（仮称）例としては、「超高齢社会を担う市民力」を講座のテーマを以てし、内容は健康づくり、地域包括ケアシステム、心の健康、福祉を知る、協働を学ぶ、地域活動団体からの実践報告、成年後見人制度、居場所づくり、市民の役割、市長への提言などが考えられる。

委員：市民大学を見つめると同時に他区市町村の参考事例を下に町田市が抱えている問題についてどう紐解いていくかを、当日資料「「市民大学」の現状課題と今後の方向」にまとめた。市民大学が問題であるが、市民企画講座、利用者交流会・まつり・他も絡むものだと思う。つまり、市民企画講座は市民大学の一環の流れであり、利用者交流会は地域の仲間づくりや交流となり市民大学に繋がるものである。参考として利用者交流会・まつり・他也見ていただき市民大学もみていただきたい。市民大学を説明すると、卒業生市民も含むプログラム委員がいて、受講者は希望者である。学びは分野別に分かれ、講座数は18あり各5～13回シリーズで実施している。内容は先程、柳沼委員からご説明があった通りであり、さらにことぶき大学が市民大学の一環として付随している。併せて市民企画講座で開催される内容も市民大学に準ずる内容で開催されている。さらに仲間を繋ぐ役割の利用者交流会、まつりが存在している。見直し案としては基礎的な講座があるが、そこに総合的な講座が抜けているのかを感じる。

現状の課題は何があるのかということで、「現状の3つの課題」を挙げた。「個々の市民大学講座はしっかりしているが、年間80～90事業で動いているため、どこに向かっているのか、共に学ぶ方向がわからない」というのが1点目の課題である。また、「活動の核になる市民が

高齢化してしまい、新たな人材確保が難しく、無償の企画運営委員の応募が少ない」という状況が2番目の課題である。3点目は「地域を育む」学びに至るような講座が今一步欠けているようである。他区市町村ではどのようなことをやっているか参考事例を挙げていきたい。ビジョンの面では、1点目として板橋区の「今を学び未来（あした）を創る」いたばし会議の継続実施」があり、3か月置きに既に100回以上実施しているものである。やはり、継続することで定着させていて、社会福祉協議会と公民館とがセットで動いている強みがある。2点目の岡山市E S Dメガネによる「えーものを子孫の代まで」をつくる活動では、7点の重点分野を決めて1つのビジョンとして「えーものを子孫の代まで」という言葉で総括している。3点目は国立市の「都市社会教育、公民館実践の未来像」というコンセプトである。7つのコンセプトを掲げ、個別・部分的な実践を繋ぎ合わせて、地域社会を再構築しようという活動であり、具体的なコンセプトとしては「何処に向かい共に学ぶのか」、「学びの循環、行動から学び次の行動とへ成長」、「市民と地域と行政を繋ぐコーディネート」、「まちづくりの幅広い学びと対話のプラットホーム」などがある。未来の時間軸に向かって皆がビジョンを共有するものを作らなくてはならないと思うが、町田市の市民大学には欠けている気がする。沢山の事業をやっているが、それを総括するようなものが必要だと思う。また、人材面として、4点目は柏市の超高齢化団地「くるる」セミナーを挙げる。学習を通して住民間に繋がりを創る活動で、「くるる」は「聞く、みる、する」から取っている。地域での人間関係を作るということは、地域の健康・治安・経済に影響を与えるものであり重要であるとして、東京大学と柏市と福祉団体が連携して行なっている。5点目は、八王子市の「オトパ」=お父さんお帰りなさいパーティーと名付け、定年退職した世代に活動団体の紹介するイベントを八王子市と50～60のボランティア団体が一体となり行なっている。また、川崎市の「生涯学習相談員研修」では、何を学びたいか相談できる相談員の常に置いて、その研修を行っている。相模原市の「地域活動実践講座」でも、地域デビューしたい人向けの研修を行っている。町田市でも以前コーディネーターの会があったが、相模原市では続いている。6点目は、渋谷区の「シブヤ大学」である。2万5千人程が参加登録し20代～30代の女性・会社員が大半である。N P Oが主になり渋谷区が援助しているが、新たな人材をインターネット等でどんどん集めてきている。課題解決の面については、1点目で挙げた板橋区の「いたばしまち学校」では公民館を出て問題を解決していく動きがある。板橋区は福祉団体と繋がっていて、現場へ出て行って地域の問題を解決している。また、国立市では定期的に「未来夜話」を開催し、社会教育者が企画、市民が連携するかたちで地域問題を取り上げ解決している。導入、事例、熟議を行い、話し合いだけで終わらせず成果を次回の説明する流れを作り、うまくいっているようである。6点目に挙げた渋谷区の「シブヤ大学」では、渋谷区のまちの全てがキャンパスであり、喫茶店、デパートなどどこでも勉強会を行い、先生不在でコーディネーターだけの学び合いを展開している。7点目の川崎市「かわさきアカデミー」は、N P Oで運営し、市全体で一貫した広域講座を地域5か所で展開している。こういった事例を頭に入れながら、町田市の弱点である「ビジョンがない」、「人材育成が苦しい」、「地域に一步踏み出す講座がない」という点を展開していくれば、具体的な策が生まれるのではないか。一考察として、1点目は「ビジョン・目標の見える化へ」、2点目は「新たなS t e p u pの人材作りへ」、3点目は「地域へ出ていく問題解決へ」という点を加えて、新たな講座や地域に出ていく総合的な講座に繋がると良いと思う。

委 員：当日資料「「市民大学」の現状課題と今後の方向」の今後の方向性には、空欄があるが何が入るのか。

委 員：一考察であり皆さんで考えていきたいということであえて空欄にした。

委 員：前々回からの課題は、「地域を育てる」という点ができていないということである。私は、事前意見でも書いたように、学んだことを地域に展開するという趣旨があることを募集案内に入れても良いと思っている。コンセプトの「あなたを励まし」は現在の市民大学でもできているが、応募する方は「暇だから行ってみよう」という方が大半である。具体的にどのように取り組んで行くのかを考えて行くのがポイントではないかと思った。

委 員：「地域を育てなさい」と言われたら、市民大学はすごくハードルの高いものになると思う。「学ぶのはいいけど、人前で話すのはとても」と思っている方が多いと思うので、表現や発表をす

- る講座といった学んだことを外に出す練習をする講座が必要だと思う。全くやったことがない人が「地域に展開しなさい」と言われると学ぶこと自体をやめてしまうのではないか。
- 委員：「地域を育む」活動を全くやっていないかと言うと、現在でも環境や福祉など多くの修了生団体があり色々な活動がされている。生涯学習センター側のPRする力が全くないと思う。色々な団体があるので、どんどんクローズアップしてマスコミや地域から地域へとPRをしても良いのではないか。また、まつりや交流会のときに色々なサークルの紹介やPRをどんどんやるべきで、活動に対して過小評価していると感じる。
- 委員：市民大学とは2005年から係わってきている。当初は学んだことを地域で展開する指導があったから、多くの団体が存在していたが、現在はその大半はなくなっている。なぜかということを検証した上で、今までに出た素晴らしい意見に向かっていくべきではないか。
- 会長：ゴールや目標という話があつたが、目標は達成しなければならないものであつて、今ここで議論されているのは目標に向かって行くその先が欲しいということではないか。今日、お二方にお話いただき、議論を深めていただいたことは貴重なものであった。次回は私の考えも、ご提案させていただきたい。
- 委員：前回欠席で今回それが資料を提出する話があつたかわからないのだが、期末に向かっているので、この協議会で言いつ放しで終わるのは消化不良に感じる。意見を出し合い集約するなり、3月までどこまで行くのか、何をするのかを明確にしたい。
- 会長：それを決めたいのだが、私がお伝えしたいのは、企画する側のプログラム委員の成果が活きているのか検証したかった。今市民大学で問題になっているのは、カリキュラムのマンネリ化や、学習を進めていくと初心者がついていけないと言われている。プログラム委員はそういう意見や募集人員をどう集めたらいいかなどを気にしながらやっていると思う。最終的には、市民企画をする人やプログラム委員が、自分たちが担当する講座はどういった位置づけなのかがわかり、「あなたを励ます」講座なのか、「地域を励ます」講座なのかを明確に示すものがあると、やりやすいのではないかと思う。大きなマッピングを作り、市民大学を1つの機軸にしてことぶき大学などについてもその機軸の中で動いて行くことを考えている。その案がどうかということも含めて、次回以降考えていきたい。
- 委員：イメージが沸きづらいのだが、プログラム委員が自己分析していただく機会を作るということか。
- 会長：企画をする人が不足しているということも1つの問題であり、養成しなければならないという点もある。企画する人たちが自分たちはどこの位置づけを担当しているのかわかるようなものの大枠を決めるということを、3月までにやっていきたい。
- 委員：あくまでも我々が分析するということでおろしいか。「あなたを励ます」ことはできているが「地域を育てる」はできていない総意になっているが、それぞれの講座によってできているかが異なるということを1つ1つ分析して行くことになるか。
- 会長：1つ1つ分析して行くよりも、今まで体系的に色々なご意見をいただいているものをラッピングしてみませんかということである。
- 委員：それは当然必要になると思う。
- 会長：少なくとも現在市民大学について議論するなかでプログラム委員が抱える戸惑いは、我々の責任だということを思っている。
- 委員：プログラム委員として現在やっている方を尊重して、私たちがまとめていくということではないか。
- 委員：ここでまとめたことは、生涯学習センターへの提案ということになるのか。協議会で決めたことを生涯学習センターが受け入れたとしても、プログラム委員は講座を計画するに当たりそれを受け入れる準備はあるのか。
- 会長：準備をしていかなくてはいけない。
- 委員：委員によっては、「私たちはこれでやってきたのだから、受け入れない」ということになってしまい、難しいのではないか。
- 会長：それは変革しなければならない部分である。
- 事務局：それは先にお約束する点ではないと思う。この運営協議会として、どういったあり方を提案し

- ていくのかをプログラム委員の皆さんにも考えていただくということになる。
- 委 員：生涯学習センターとして受け入れるかはわからないけども、何かしらの改革の糸口になる提案をしていくということか。
- 委 員：先程、辰巳委員がおっしゃったように、委員の意見はこうであったというのを記録に残し、1年間の成果をレポートにまとめて提案しようというのが良いのではないか。それをプログラム委員を持って行くのか、生涯学習センター長に提案するのか、あるいは幅広く教育委員会にもって行くのかなど、どうしていくかという話であると思う。
- 委 員：それぞれ皆1度出してみるのはいかがか。
- 委 員：皆それぞれアイデアや思いや提案があると思う。この場だけではなく、ある程度文章化して、提出できるものになると良いと思う。
- 会 長：最終的に同意したものがレポートとなる。今年度末を〆切とし、まとまらなければその後も考えて行くことも含めてやっていきたい。
- 委 員：それぞれ何か言いたいことがある人は、1月の協議会に提案しなくては3月の〆切には反映されないということでよろしいか。
- 委 員：あと3回しか議論がない中で、まとめ方をしっかり決めないといけないと思う。どういった方法にしたらよいか。
- 委 員：今日のお二人の提案を土台にさせていただいて、進めたら良いのではないか。
- 会 長：それで進めたい。
- 委 員：この1年間の議論を議事録等で拾っていき、レポートに仕上げるのが良いのではないか。個別アイデアとして皆さんが出したものでも良いが、折角見学して皆さんで感想を述べたので、まとめには反映したほうが良いと思う。
- 会 長：市民大学はそれぞれ質の高い学習をやっているのは事実なので、それぞれの委員で認識いただき、見学した感想はそれほど重要ではないと思っている。
- 委 員：見学は重要だと思う。見学があっての結論なので、きっちりと提案したいということを最初に持って来て、そこに至る経過として皆さんが実際に足を運び出てきた感想や協議会で出てきた意見も付けたほうが良いと思う。そのほうが、協議会で一生懸命考えたということがプログラム委員の皆さんにも伝わるのではないか。
- 事務局：生涯学習センターの中の市民大学の位置付けというところまで提案するとすれば、もう一步踏み込んだものとして、見学についても必要だと感じる。今まで議論したことについても議事録などで振り返り、きちんとお伝えいただく。その結果として、「こう思ったので、こうしていただきたい」という要望のようなまとめ方ができるのであれば、議論していただきたい。
- 会 長：市民大学を通して、「生涯学習センターとは」という部分も含めて提案できれば良いのではないか。
- 委 員：生涯学習センターの役割の中で、市民大学の役割が「あなたを励まし、地域を育てる」というところまで行っているのか、行っていないか。もう少し改良していけば、よりよいものができるのではないかという発想で、皆さんも考えていると思う。現状と今後の向かうべき方向性を出せば良いと思う。
- 会 長：次回までには、今日出していただいたお二人の意見と違うものがあれば、出していただきたい。
- 委 員：過去の議論を確認すると重要なことが欠落していたようである。生涯学習審議会委員から「地域社会の課題に対応する生涯学習の更なる充実に向けた仕組みについて」というご指摘が出ている。このテーマが重要なのではないか。
- 委 員：前回の協議会で、報告があった件である。現在取りまとめ中であるということであった。
- 委 員：「地域社会の課題に対応する生涯学習の更なる充実に向けた仕組みについて」という点については、具体的な話はなかったと思う。
- 事務局：生涯学習審議会の報告は、前回の協議会で答申を資料で出している。現在取り組んでいる諮問や、前回の諮問では、具体的な話は出ていないと思う。
- 委 員：「地域社会の課題に対応する生涯学習の更なる充実に向けた仕組みについて」という諮問が出ていて、現在まとめつつあるということか。
- 事務局：結果はお話をしていて、諮問そのものは資料として出ていなかった。

会長：諮問に対する答申ということで、ここから進めるということではないか。
委員：かなり煮詰まっていて、12月15日〆切の資料が出ているということではなかったか。
会長：生涯学習審議会の議論に乗っかり、我々がすべきことは何かということではないか。
委員：生涯学習審議会の結果を見て、我々がどう進めて行くべきかということではないか。取り入れるべきこともあるし、必ずしも一致しなくても良いのではないか。地域との関係というのはお互いに共通するものである。

次回は1月25日月曜日10時～町田市生涯学習センター6階学習室2で開催する。